

特集1 台風クラブ

相米慎二監督インタビュー

最も将来を期待する エゾカモシカ

藤田 真男

今でも子供は

“めんどくさい”

インタビューの最後に、こう質問した。
「映画撮るのって恥ずかしくない？」

「恥ずかしいよ」

「恥ずかしいからよけい、ああいうヘンなことに拍車がかかるの？」

「そうかもしれないね。何かモノいったりするのって、そんなに楽しいことじゃないよな」

「とうてい小説なんか書いたりできないね。人のせいにすることもできないし」
「分かんない」「知らない」とかいうこともできないし。

「うん、そういう都合のよさが好きなんじゃないかな、映画の。根本的には恥ずかしいと思いつつ、何かやってなきゃ」

そんな相米監督だが、このところ恥ずかしいことが続いた。生まれて初めてネクタイをした。取材を断わるため“脱出”して酒ばかり呑んでたそうだ。少し落ち着いてきて、本日のいでたちは下駄ばき、信玄袋みたいなヘンなバッグ。妙に似合う。

「ラブホテル」と「台風クラブ」の試写会でもらった資料に、ごくごく簡単な相米さんの経歴が書いてあって、中央大学法学部中退なんだって？

「知らないよ。そう書いてあるんなら、そうなんだろ」

急に話題を変える。

「ラブホテル」どうだった？」

「面白かったけど……」

「けどの下。けど、何なんだよ。教えるよ、タグ見するなよ」

「基本的にセンチメンタルなの？」

「あれ、センチメンタルかね？」

「『ジョンベン・ライダー』でも雨の遊園地のシーン、あそこで俺は泣かせようと思ったのにな”って、いってたじゃないですか。」

「でも、それはセンチメンタルとかそういうことじゃないだろう。センチメンタルなことで、人は泣いたりしないじゃん、あんまり」

「でもジーンとさせたいというのは？」
「ラブホテル」では、そんなこと思わなかったね」

「もんだよしのりの歌、あの選曲は？」

「そんなにセンチかな、あれ」

「いつも、要になる曲は自分で選んでしょ。『台風クラブ』の『もしも明日が』にしても。」

「それはそうだけど、『もしも明日が』なんか違うじゃない。『ジョンベン・ライダー』の『雨ふりお月さん』じゃなくてマツチの歌のほうの系列じゃない。いわば時代の上澄みではやってる曲がさ、同じ世代でも違う歌い方とか違う感情で歌えばさ、違う歌になるっていう、そっちの方向じゃん。それと、ちょっと違うもんな」

「じゃ、曲がセンチメンタルなんじゃないかって、使い方がセンチメンタル……」

「どうも釈然としないな。センチメンタル……あんまり好きな言葉じゃないな。こないだ初めてそういわれて、エーッと思った。俺、センチじゃないもん」

どうも釈然としない。聞き方がよくないのだろう。めんどくさいので先へ進む。なお、このインタビュー記事は「台風クラブ」を見てから読んだほうがいいのかと思う。読んだらもう一回見る。「デキの悪い映画は何回も見ると、その時その時で





違っで見えて面白いだろ。一回ぐらいでやめる人はよくない。二回見てくれよ、カネにもなるし」と相米さんもう。全くその通りである。ただし「デキの悪い映画」というのは信用しないように。

「昨日、二回目見てね、相米さんの映画って何回か見ると何が映ってるかは、かるうじて分かる。『ジョンベン・ライダー』のデブナガ君も出てたんですね。

「ああ、出てる出てる」

「彼は『台風クラブ』もう見たの？

「見たんだろうね。あのヤロー、何かいってたぞ。あいつはいつもバカにするからよ。『やっばり、相変わらず分かんね』映画だね」とか「大して進歩してないですね」とかいわれて」

「今でもやっばり子供は嫌い？」

「好きじゃないな。嫌いというより、めんどくさいんじゃないかな。大人とか、ある共通の時代を生きてきた人たちだと、言葉少なくてすんだりするのにさ、ガキと話してるとさ、何かよけいなこといったり殴ったりしなきゃいけない。そういうの、めんどくさい」

この「めんどくさい」というのも、あまりフツウの意味にとらないように。

俳優さんが気持ちよくできればOK

相米さん自身の子供時代は、何かになれるなどと思わなかった。なれないことが中学生の頃すでに分かっていた。小学校から高校までは北海道にいた。釧路から一時間ぐらいの田舎。

北海道って台風こないと思ってた。「そんなことないよ。けっこう大きいのがきて人が死んだりするんだよ。そんな差別しないで(笑)」

「渋谷東急(東京国際映画祭ヤングシネマ85)でやった時、『子供の頃は面白い台風があった』って。具体的にいうとどういのが『面白い台風』なの？

「どういうって……大体何でも面白いじゃない。まア、いい切れないんじゃない」

「何となく面白いの？」

「何でも違っで見えるのが一番面白いよね。何かモノが違っで見えるっての——あんまりないけどさ——台風とか自然の外的なことからまず違っで見えることが、あるじゃない。だんだん内的な自分

の変貌で違っで見えることもあるけど、それに気づく前ってさ、わりと自然の中を違っで見えたりするじゃない」

「うん。じゃ、映画のラストシーン、完全に水びたしになって校舎だけ水面から出てくるぐらいが理想的なわけですか？

「うん、ほんとはね。できりゃ、それぐらいすべきなんだろうけどな。そんなことしてたらな……」

「ホンモノの雨は全く使っていない？

「降らなかつたもの、撮影中。台風なかつたでしょ、去年。でも、それはそれでいいんだよ、映画なんだから」

「映画なんだから」——ログセである。

「僕は二回見ても気づかなかつたけど、雨降らしのシーンでボンブ車が映ってたっていう人がいたけど……？」

「あ、そう？ 知らない」

「自分の映画でしょ!？」

「知らない」

「はつきり大々的に見えたって。」

「そんなことねえだろう。いい目の人だナア、何を見てんだら(笑)」

「そんなことありえないよね、いくら相米さんの映画でも。」

「あるかもしれないな」

「あつてもどうでもいいんでしょ。」

「うん、あつたらあつたでいいんじゃないの。内緒の話だけど、けっこう映るところあるもんな。気がつかないよ、それは。俺もある時ふつと気がついて、あれエ(笑)」

「渋谷でやった時、『できれば編集なんかやりたくない。撮ったまんまが一番

いい』っていつてたでしょ。

「その時はそう思っただけで、マジメにそう思ってるわけじゃないよ」

「そう？ でも物理的な失敗は別にして、NGってのはないと考えていい？」

「NGがないつうか、全部NGつうか。映画なんて所詮、全部ウソやっつてんだからさ、全部NGだつていつたつていいんだしさ……」

「全部OKでもいい？ じゃ、やっばりNGとかOKとかないわけね？」

「うん、ま、基本的にはないんじゃないかね」

「NGじゃなくてもリメイクする時はどことが気に入らないの？」

「そんな難しいこというなよな、お前。それじゃ『何であれがOKなの』って聞いているのと同じだよ(笑)。そういうのが分かるというけどな、何であれがOKなのか、NGなのか……やっばり痔が痛かつたりするからNGだつたりさ、水虫がかゆいからOKだつたりさ、そんなもんじゃないの。大体、俺の問題じゃないよ。

俳優さんが気持ちよくできてれば、何でもOKなんじゃないの」

「それから、この前も何か聞かなきやと思いながら、それが何なのか分からなかつたんだけど、あの教室の窓から飛び降りた男の子(三上君)は、どうなつたと思えばいいの？」

「どっちがいいの？」

「どっちがいいっていわれても分からないけど。あそこは編集で切ろうかどうか迷ったんでしょ？」



自分の映画は よく分からぬ

「台風クラブ」は、ある夏の木曜日から月曜日の朝までの物語である。土曜日の夜、中学校の教室に閉じこめられた少女たち。校庭へ出て、台風の目の中で「もしも明日が」を歌う。同じ頃、家出した少女（工藤夕貴）は東京の街をさまよう。街頭でオカリナを吹く男女。「もしも明日が」のメロディ。台風が通り過ぎてゆく。日曜日の朝。三上（三上祐一）は仲間たちの目の前で窓から飛び降りる。月曜日の朝。何ともなかったかのように登校する少女。水びたしの学校を見てつぶやく。「金閣寺みたい……」

——ところで、工藤夕貴のほうは、日曜日には何してたんでしょう？
「おう、何してたんだろうな。あれこそ、だから、確かにそうなんだよな。夕貴のほうはもつと（シーンが）あるんだよ——あるんだよって、こんな話してもつまんないけどよ。な、つまんねえな（笑）。自分の反省のためだけだ——あれはもう一回帰ってくるんだよ、尾美（としのり）のところ。それで尾美の部屋のオモチャのことをエンエンと話するんだよ」

——そこも迷って切ったわけ？
「迷ったつうか、それを入れるとき、男の子のほうを拡散させるんだよ。拡散つうか、説明ほくなるんだよな。三上君の説明するように見えちゃうのがつらく

てね、どうもそういうふうにしかとられないような感じがするんだよね。脚本はそうじゃないんだけど、俺がヘタだからさ。脚本はカットバックしてるんだよ。確かに夕貴がいつてることで、三上君がなぜ死ぬのかが話をしてるんだよね。脚本の時はそれで説明ほく感じなかったんだけど、絵にしちゃうと何かね、代弁してるような……みともないから切っちゃったんだろうけど」

——こんなこと聞いてもしようがないかもしれないけど、三上君が飛び降りて水中に突っこんだ（というより突き刺さっている）シーンののは、実際にはどんな撮影だったの？

「別に、ただ埋めただけだよ。管（呼吸用の）を、長いの通してさ。けど、あんまり効かなくなったらしいぜ。必死に息止めてたらしいぜ（笑）。それで、マジメにね、真剣にね、一時期考えてただけだよ、あいつがカボツと上がってきた時の顔、ラッシュを見た？ 撮ってあるつうか、フィルムは回ってるからさ。苦しくなつてさ、ズボツと顔出すんだよ。その時の顔がさ、ほんとにいい顔してんだよ。そこまでつつけちゃおうかと思つてさ（笑）」

——それは別のバージョンで面白い。
「なつ、別の映画になるもんな。えもいえない顔してんだよ。息苦しさからようやく抜けられたっていうか。あのあと、女たちが足持って引き抜こうとするところもあるからさ、男の子は男の子で俺のOKが出るまで、下で必死にこらえてんだよ。で、ポコッと出てきた時の顔が可愛

「迷ったね」

——迷ったあげく……？

「入れたほうがよかつたね、やっぱり。子供たちが窓から見下してるとここで終わろうかと思つたの」

——相米さんなりの想像でもいいから、飛び降りて頭から水中に突っこんで、それからどうなったんでしょう？

「いや、脚本でははっきり死んでるから。俺は基本的に脚本の通りに撮ってるから。椅子をあんなに積んでたりするのはさ、俺がまだ分かってないからあんなに長くなったりするんだろしな、死ぬとかさ、そういうことがな。基本的に

は、俺は死んだほうがいいと思うけど。そうすれば……みんなあやまって飛び降りてもさ、結局みんなチョンボして生きてのびてきちゃってるわけじゃないか、みともない大人になつてるわけじゃないか、俺らみんな……あそこで死んでくれたほうが気持ちいいじゃないか、なァ」

——僕は生きてるのかなと思つた。
「あ、生きてると思つた？ けつこう生きてると思つた人が多いみたいだな。それならそれでいいしさ。何かみともない大人ばかりふえるより、一人ぐらい死んでくれたほうが気持ちいいじゃない」

くてさ(笑)……あそこまでやったほうが、いい映画になったかもしれないア」

「じゃ、いいと思ってないわけ？」

「え？俺は分かんないよ。自分の映画なんか分かるわけないよ」

「愛着もないの？」

「ないア。人の映画の場合は記憶として残ってくんだけどさ」

「何で映画監督になったの？将来、何になるうと思ってるの？」

「え？エゾカモンカ(笑)」

「あの三上君のセリフは脚本に？」

「あれは助監督さん。あのシーンはね、助監督に公募したんだよ。だからみんな書いたんだよ」

「その中で一番おかしかった？」

「うん、ほかのはわりとマジメで、あれだけバカにしてたからさ」

「マジメに考えちゃった人もいたわけね、リッパな監督になりたい」とか。

「バカいえ(笑)」

「教室の標語もそう？」目標のある人間はくじけない」とか「夢と希望と目標を持って戦い続けよう」とかいうの。

「あれは、あの教室にあったの？」

「すごいなア(笑)」

「それをそのまま、半分流用したんだよ。あの折り鶴だってあったんだぜ」

「ロケした学校は長野にあるの？」

「うん、佐久。脚本には何も書いてない」「ロケハンして何が気に入ったわけ？」

「いや、あすこしか貸してくんなかった。もっとも、あれだけのことやるんだから、どの学校でも貸してくれないよね」

「あんなにメチャクチャにして、あとで怒られましたか？」

「いやいや、校長先生がすごい教育者でね。あの校長先生のおかげで完成したんだよ、すごい人だね。PTAとかに怒られたらしいけど(笑)」

「出演した子供たちは映画見て何と？」

「大体みんな、よく分かんなかったみたいだ。ここの映画だったんすか、撮影は面白かったのね」とて。あれ、傷ついたからよく覚えてる」

「でも子供に見てもらうのがいい？」

「それはそだね。でもまあ、現役の子供には分かんないかもしれないけど、今の時代生きてりゃ、別にこんな映画、見ねえかもしれないし。誰が見りゃいいのかね。でも、大人が見たってじゃあねえしな」

「じゃあねえって……僕の印象では、」

「翔んだカッパル」に似てるというか、延長しているんじゃないし、よく分かんないけど……」

「そうかな？あれはだけど、そういうふうには思わないですみそうだったから、やったんだと思うけどな。あんまり子供だ何だって思わなかつたんじゃないか、な、おそろくな。もっと面白いこといえば、特殊な観念に近いこともあるしさ、わりと今までの映画よりはどっか残酷だったりすることもあるしさ……(しばし何か考えこむ)……もしかして、はっきり終わらな。全然、思いつきなくなっている。封切決まったら、どうでもよくなっちゃったよ(笑)」

「じゃ、今は何考えてんの？」

「まだアタマがサラシクジラだから」

「真っ白だったんだ、トウフみたいだったんだ、アタマが。ちょっと、サラシクジラぐらいシワが戻ってきたんだ」

「フーン。一回、相米さんの脳波をとるか、ウソ発見器にかけるとか、アタマに電線つないでインタビューしたいね。」

「今いったのウソ！とかね(笑)。俺、ウソつきではないはずなんだ」

「それはそうだけど。珍しいですよ、相米さんぐらいウソつけない監督は。」

「バカにしてんのか、コンニャロ！今の、はつきりバカにしてるよ(笑)」

「ソソケイしてるんですよ。」

「このあと、「雪の断章」に続いて来年撮る予定の「富士」について聞いたところで時間切れ。ヤングシネマ'85出品の条件が、次回作の企画提出だった。武田泰淳の小説「富士」は前から読んでいたが、「どうせ一等賞になるわけでもないしよ、何でもいから、ほんとにいいものいってみたいよ、ほんとにいいものいってみたいよ、その時は、どうせアテにならないの、それだから、何出したって恥ずかしくねえやっつて」

「それから、この日開かれた「台風クラブ」公開決定を祝うパーティ会場。会場に、ヤングシネマ'85大賞のトロフィー、盾、賞状の三点セット。賞状を見ると、

「最も将来を期待する監督賞」とある。「ア、ほんとはこういう賞なの？」

「あ、そうかい？知らないよ」

重厚・壮大なるD・リーン監督の感動の名作巨篇たゞ今激賛公開中!!

(カラー作品)イギリス映画/ドルビー音響システム/松竹富士株式会社

インドへの道

1971年度ベストテン第2位入賞の傑作「インドへの道」ライオン映画の巨匠D・リーン監督の大作。



招待一
各20名、ま月を
待し各8
読者に名
者ごにさ
読興行に
御愛に
劇場9月
場を3日
下記60計
■記し注
す明末
計す明末
下記60計
■記し注
す明末

東 劇 東 急 レ ッ ク ス 新 宿 京 王
(541)2711 (407)7019 (356)3518

セ

「ラー服と機関銃」が完成した直後、相米慎二、根岸吉太郎、鴨田好史というメンバーが、につかつの助監督時代にロケのため訪れたことのある玉の井へ酒を呑みに行くというので、三人のよもやま話を座談会の記事にさせてもらうつもりで、ノコノコくつついていったことがある。

座敷に上がってウロウロしているところへ店のオバサンが注文をとりに来た。酒やら何やら頼んで、相米さんが刺身を注文した。「刺身はどれにしましょうか?」「何でもいよいよ」——オバサンにとっては「何でもいよいよ」ではすまないもので、「〇〇円のと××円のがございませう」という。どっちにしても大差のない安い店だったから、悩むほどのことはないのだが、相米さんは返答に困って一瞬立ち往生してしまった。何だか恥ずかしがっているようにも見えて、おかしいといえおかしな光景だった。そしてドギマギしたようにぶっさらぼうな小声で「××円のやつでいいや」と、ちょっと高いほうを注文したのであった。どうでもいいようなつまらないことかもしれないが、僕はこの時の相米さんの様子を見ていて、うまくウソをついたりできない人だなと分かったような気がして、相手を

見透かすようなあのインケンそうな目つきも、それほど恐ろしくなかった。その後、何かにつけて相米さんの口から聞かされることになる。「何でもいい」「どうでもいい」を最初に耳にしたのも、この時だったわけだ。

「批評家は、なぜワンシーンワンカットなのか書かないと、相米論は展開しない」——とこだわる根岸さんに対して、相米さんは「何でもいいからだよ」としか答えない。批評家なんてやつらが何を書こうが「あんなもの何の関係もないからな」「ほんとに、どうでもいいからな」という言葉には、気取りも術いもない。「セラー服と機関銃」がヒットした後には、これも自分とは関係ないといいながら、映画はこうでなくちゃと喜んでるように見えた。言文一致みたいな人だから、自作について語った言葉も相米さんの感情の起伏を想像したうえでなら、そのまま額面通りに受けとっていいように思う。「分からない」といえば分からないのだし「何でもいい」といえば何でもいいのである。とはいえ、ワンシーンワンカットであろうがなかろうが何でもいい——というわけではなさそうである。もう少し言葉を足すと「何でもいって精神なんだ」そうである。ワンシーンワンカットという手法そのものよりも、こ

の「何でもいいって精神」について書いたほうがいいように思う。「何でもいいって、そういうの分かる?」と相米さんが自問自答するような口調でいったので、安直に「ええ、分かります」と相槌を打ったら、あの目で見らみ返されてしまった。この時は恐かった。三人が話しているのを聞いていると、それぞれの性格の違いまでうかがえて面白かった。

相米慎二の映画をめぐる一考察

FORUM JOURNAL ● 日本映画

藤田真男

相米さんには話をまとめようなどという気は全くなさそうだが、一方、根岸さんは相米さんに合わせるように見せつつ、時々、座談会風にもっていつてまとめようとしているようだった。映画作りにおいても「収拾つけようと思わないわけだ、俺はな。収拾つけようという意志が働くのはさ、大体、これが演出やる?」という相米さんに対し、根岸さんはオ

ソドックスな演出家だと思つた。相米さんのこの過激な発言を聞いた時には、我が意を得たような気がしたのだが、その後いろいろな疑問や気がかりがふえていつて、それこそ「分らない」「どうでもいい」「何でもいい」という気分になって、机の上にとまった夏休みの宿題をにらんでいるような状態である。

こんなことばかりダラダラ書いていても仕方がない。アホみたいだ。批評っていうのは遠くまでいき、遠くのイモ畑まで行ってイモを持って帰ってくるんだ——という誰かの名言が脳裡をかすめたりもする。相米論などとおこがましいことはあきらめて、ジグソーパズルの断片のような気がかりを、バラバラのまま並べて書きとめておくことにする。とかく、いい考えは後から浮かぶものだ——という名言もあつたような気がする。

第一作『翔んだカップル』、第二作『セーラー服と機関銃』、第三作『ジョンベン・ライダー』と、三本並べてどの根っこがどうつながっているなどイモの品評会みたいなことをやるのはシンドイし、長回しが一作ごとに、場面ごとにどう違うかなんてこともやめて、相米さんの言葉でいうところの「ヘンなこと」について少し見えておきたい。そのよう

な実験めいたことを、相米さんは自分では嫌いつつも、それをやらないとどうにも動きがとれないようなものもある。

「一応フツウの映画に見えるといつてもいい『翔んだカップル』でヘンだったのは、尾美としのりの落語とビルの谷間に浮かぶクジラなどである。落語は脚本の丸山昇一さんが趣味で入れたのだと、ご本人に聞いてとりあえず納得したが、その丸山さんも相米さんが突然「クジラ、クジラ！」といい出した真意は分からなかったそうだ。気になって仕方がないのでずっと後になって聞いてみた。十年前に大瀧詠一の「空飛ぶくじら」という、あの場面にびつたりと思える歌があつたので、それかなと思つたのだが、相米さん自身も「そういうえはそうだなあと後で思つたけどね」というだけで、結局、分からなかった。逆に、僕が見たばかりの『ジョンベン・ライダー』について「どういう映画なんだよ、教えるよ」としてつく聞かれた。こういう時の相米さんは相手をからかかって楽しんでるようにも、満足そうにも見えるが、別にはぐらかさうとしているわけではなさそうだ。

では、どこからそういう「ヘンなこと」が生まれてくるのだろうか。相米さんの質問に答える術もないので「無意識で撮つてると思う

ような部分がありますか？」と聞いてみた。

例えば、鈴木清順さんなら、泉鏡花は無意識の作家であると定義して、その無意識に光を当てて映画を作っていくわけで、『陽炎座』の〈水〉は森通を表わす、というふうに説明していますよね？ 相米さんの場合だと『ジョンベン・ライダー』の〈水〉はどこから出てきたものなんですか？「頭よくないからそんなふうにくまく説明できないよ」といつてしばらく考えるような顔をしてから、スタッフの間では冗談半分にナントカと水の物語という映画にしようとして初めから話していたのだと教えてくれた。

〈水〉と、もう一つは〈祭り〉である。

僕は、開巻八分間の長回しの撮影を二日間見物していたのだが、現場を見ているだけでもどんな映画になるのかまるで見当がつかなかった。このプールでの一回目のロケは、さまざまに試行錯誤と準備だけで終わった。助監督の人が「またヘンなこと



考えたんですよ」といって、相米さんにへんなメモを見せたりしている。全員がへんなことを考え、勝手に実行していく。いっどんな事態が起きてもいいように、二本の映画が撮れそうに思えるほど何でも準備してある。陽が傾けば隣の民家から電気をもらってライトをつける。画面ではよく見えないが、二人のヤクザが汚い池に落ちる。プールの子供たち

に続く洗礼である。衣装も何着か用意されている。何に使うのか分からないものまで含めた雑多な機材や道具の周りで、スタッフと役者たちがワラワラと動き回り、その様子を相米さんが黙って眺めている。校庭にはサッカーやランニングの練習が続いているエキストラたち——だったのが、熱海から帰って二日目のプールのロケの時には、彼らの代わりに盆踊りのヤグラが立っている。祭りが終わって、あとかたづけの最中である。カメラが子供たちを追って校門を飛び出していつて壁の落書きで止まる。やれやれと安心していたら突然、カメラだけが無人の校庭をふり返ったので、何も知らなかった僕と周りにいたスタッフがあわてて草むらに身を隠す——という具合にスリリングな撮影なのである。これだけ複雑な長回しをやれば、リハーサル通りに事が運ぶとは限らないから、フィルムが足りな

くなるんじゃないかと心配もしてしまう。校庭にマイクの影が映っているくらいは愛嬌のうちだろう。

ワンシーンワンカットが、スタッフや役者たちを過激にさせる手段のひとつであることは間違いない。と同時に過激なスピードが演出、演技、あらゆる雑物をそぎ落としていくところに、その目的のひとつがあるように思える。目的といえないかもしれないが、とにかく結果としてそうなる。ワンシーンワンカットの画面を見ていて感じるのは、たとえカメラや人物が動いていない場合でも、空間そのものが加速していくようなスリルにみちているということだ。例えば『翔んだカップル』のもぐらたたきのシーン、あるいは『薬師丸ひろ子が料理を作るような何でもないシーンが、実にスリリングではなかったろうか？』『セーラー服と機関銃』のひろ子が二本の足でドンと立っているところがいい、というようになことを相米さんがいつていたのもそういう事情ではなかったろうか？ フツウの映画や写真で見るとは、いかにもお仕着せの衣装にしばられているように、その肉体を包む場も加速度を失って見えないだろうか？『魚影の群れ』の夏目雅子も、まるでこれまでの相米作品の中の子供たちのように見え

なかったらどうか？

加速しながらぎしぎしとせめぎ合ってすべの夾雑物をそぎ落とした場では、監督勝新太郎のいう〈偶然完全〉をフィルムに定着し得るはずである。相米慎二もそのような場をとらえようとしているのかどうか確信はもてないが、少なくともそういう期待をもって僕は相米作品を見てきたのだと思う。

話を戻すと、とにかくそんなわけで『ジョンベン・ライダー』の開巻に〈祭り〉が加えられたのは、克蘭ク・インから三週間もたった頃だったことになる。木場のシーンで火花が打ち上げられへんな行列が進んでいくあたりから、儀式や仮装をくり返しながら祭りほとんどんエスカレートしていつて、ラストは籠城シーンへと至る。サイケデリックという古めかしい言葉が浮かんでくるようなところもある。「古いですねえ、十年は古いんじゃないですか」と相米さんに聞いたら「いや、もっと古い」という。安田講堂どころか千年は古いかもしれない。そのようなプリミティブなイマジネーションが息づいているのだとしたら、それを無意識とも考えたくないのである。だが、こと『ジョンベン・ライダー』に関しては、西岡琢也の一見ガサツな脚本が、すでにプリミティブな神話的骨格を有

していたことも確かである。

西岡琢也脚本、井筒和幸監督『肉色の海』を見た時、その神話的なまでの稚拙さ、何ともいえぬ格調に驚いた。その稚拙さは大和屋笠に通じるものだと思った。その（神話）の意味などよりも、プリミティブな想像力に心ひかれる。『ジョンベン・ライダー』の「古さ」に共感させられる。子供だろが大人だろが、男だろが女だろが、そんなことはどっちでもいい。それこそ「何でもいい」のである。丸山昇一は『翔んだカッブル』のモグラたたきのシーンに「いろんな意味でせつない」というト書きを入れ、相米慎二はその大胆なト書きを見事に映画にした。あのシーンであのようにせつない風が吹いていなかったら、どんな画面になっていただろうかと思うこともあるが、それこそ（偶然）完全」というべきかもしれない。『魚影の群れ』の海にしても、初めから夾雑物の入りこむ余地はないのである。『セーラー服と機関銃』では、夜の新宿を走り抜けるシーンが好きた。できることならバイクに乗ったひろ子から、新宿の街の全景までカメラを引かなきゃいけない、などと相米さんはムチャクチャなことをいう。『ジョンベン・ライダー』では、デブナガ君に感動した。ラストシーンでカメラに向かって

て堂々と歩いてくるデブナガ君こそ、この映画の主役だったような気がする。画面の中でも外でも、映画が始まってから終わるまでの間に一番大きな変貌を上げていたのは彼だったと思う。

最後に相米監督の第四作『魚影の群れ』を見た感想を少し述べておくと、へんない方だが、フツウの映画を見てフツウに感動したような、おかしな気分だった。僕の錯覚にすぎないのかもしれないが、これはどういこうとだろう。二時間二十二分が短く感じられるほどあきずに見たし、実に風格ある映画だと思ふ。マズロとの死闘にしても、ほんとにへんな監督の手にかかれればマズロさえ演技してしまっただろうし、あるいはワンシーンワンカットで撮ったところで、むりやりガマン大会を見せられるような鈍重なだけの画面になってしまっただろう。やはりそこは相米慎二の映画である。役者たちもデブナガ君と同様、通過儀礼のようなかつてない経験させられたことだろう。けれどもどこかデブナガ君ほど変貌の落差が大きくないように見えるのは、素人の子供とプロの違いなのだろうか？ だとすればこちらは勝手に「稚拙な映画」ばかり望むのが間違っているのだろうか。ワンシーンワンカットも「あれもこれも」

ではなく「これしかない」という撮り方に見える。そうなるまでには、いろいろな迷いを相米さんが波の下に隠しただけなのかもしれないが、映画の場全体がぎしぎしとせめぎ合うような音が、僕の耳には聞こえてこないのだ。もちろん、そんなことは見当外れないものねだりだとは思うのだが……。今回の長回はまるでビルモス・ジグモンドみたいなカメラワークで、開巻の砂浜のシーンなど、どここの国の映画かと思うほどだった。けれども僕が気に入ったのはむしろ、カメラがいきなり海面を滑りだしていった、そこにほとんど意味不明の無線の交信音がかぶるドクニメントタリみたいなシーンだった。カメラの動きのせいではなく、初めに述べたような意味でスピードが感じられた。ここはよかったが、あそこはよくなかった、というような書き方は嫌いなのに、なぜかそんなふうになってしまった。しかも、よくないところは見当たらない映画なのに――。



相米慎二 『台風クラブ』

誰もが心の奥深くかかえこんでいる生の秘密の部分に、何かが触れてくるのを感じさせる映画だ。

藤田真男

「これが死だーっ！」と叫びながら、教室の窓から少年が飛び降りる。仲間たちが駆け降りてみると、飛び降りた少年は、台風が残していった深い水たまりに頭から突っこんで、水面からよつきりと生えた二本の足だけがピクピクふるえている。
数人の観客から低い笑い声が起こっただけで、僕も含めてほとんどの者は、この突然の異常事態にどう反応していいのか分からず、ひどくとまどったはずである。そのとまどいは、台風一過の不思議な静謐と光にあふれる美しいラストシーンを見せられることで一旦は遠のいたかに思われたが、映画を見終わってからもずっと尾を引いているのだった。そして、上映終了後の相米慎二監督と観客との質疑応答の中でも、誰もあの少年のことについて聞かなかつたなど今になって思いあたる。とまどいと感動——二つの感情の周囲で楕円を描きながら堂々巡りを続ける僕をつなぎとめている目に見えない力、それこそがこの映画の力なのだろう。僕に分かっているのはそこまでだ。困った。台風——台湾を越えてくるという意味でこの名が合った。そうか。辞書を引いて分かるのはここまでだ。
「台風こないかなあ」と、ぼんやり窓の外を眺めながら少女の一人がつぶやく。
子供の頃、北海道に住んでいた相米監督は、東京にきてから（それとも大人になったせいなのか）ワクワクするような面白い台風を見

たことがないという。
面白い台風！ うーん、そうか。何だかよく分からないけどすごい。相米監督は何かにつけて「それは、あんまり面白くないな」などというから、今さら珍しくもない表現なのだが、やっぱりすごいような気がする。何をいつてみたところで「面白い台風」にはかないそうもない。
映画ではなくてホンモノの台風のことならよく知っているし、いくらでも書けるのだが、知らない人にとってはあんまり面白くないだろう。小さい頃、死ぬかと思うような目にあつた。それでも一夜明けてからの数日間は無上に楽しい毎日だった。たしかに台風というのは面白いのだ。しかし今の今まで「面白い台風」などという言葉は思いつかなかつた。それとも忘れていたのだろうか。
それから少し大きくなってシスレーという

画家を知った。洪水の後の風景ばかり描いていたそう。面白い。もう少し大きくなって焼跡体験というのもあることを知った。あれはきつと戦争がどうとかいう大げさなものじゃなくて、ただわけもなく焼跡が面白かつたのではないかと疑った。地球上すべて森に埋めつくされてしまえばいいというのは宮崎駿、これも面白い。
面白い台風を見たいというのも、洪水願望や焼跡願望や森林願望と同じような衝動に根ざしているのだろうか。
原体験なんていえるものは何もない。ないから映画で見たくて映画を作るのだろうか、と相米監督はいう。もちろん、台風を見せるだけの映画ではないし、台風がサスペンスを盛り上げたりするわけでもない。台風そのものの描写が気になったのは台風の日だろうか。いつまでもそこにとどまるわけにはいかない

非日常の空間。星を見上げて歓声を上げる子供たち。

夜が明ける。世界が一変したかのような台風一過のすがすがしい空気、光、水。教室に閉じこめられていた仲間たちのことを知ってか知らずか、晴れやかな表情で登校する二人水びたしの校庭ではしゃぐ彼らは、滅亡した世界に生き残った最後の少年と少女のようにも見える。はたして何かが変わったのか、何も変わらなかったのか……。いずれにしてもこの異様な美しさをたたえるラストシーンの光景を現出させたのは、雨や風の力ではなく子供たちの心の中に渦まく名づけがたい不安と衝動だったに違いない。セリフやストーリーをなぞりながら、その不安や衝動にひとつひとつ名前を与えることも可能かもしれないが、それは、あんまり面白くない。

この映画を見た者は誰もが、心の奥深くにかかえこんでいる生の秘密の部分に、何かが触れるのを感じるはずだ。それは言葉にはできない何か、言葉にすることをためらわれるような何かだと思う。

もう書くことがない。ここまでだつて何も書いてないに等しい。書き忘れていたが、これは東京国際映画祭のヤングシネマ85というコンクール部門で上映された、相米慎二監督の未公開作品「台風クラブ」という映画についての作文である。地方都市の中学生たちが主人公。生と死について自問自答する少年。

「ただいま」「おかえり」とつぶやきながらドアを破って少女を犯そうとする少年。授業をサボってレズにふける少女。台風之夜、彼らは教室に閉じこめられる。雨の校庭で調子外れの「もしも明日が」を歌いながら素っ裸になつて踊る。家出して東京の街をさまようもう一人の少女。彼女が家へ帰ってきてさらにもう一人の少年と登校するところでラストとなる。

台風は死の象徴なのか、再生の象徴なのかという質問に、相米監督は頭をかかえていた。「ジョンベン・ライダー」と比べて云々という質問がいくつもあった。その度に相米監督は「ゴメンナサイ」をくり返していた。「ジョンベン・ライダー」よりフツウすぎて物足り



ないというフンイキの人もいた。そうだろうか。見終わった後のモヤモヤは「翔んだカップル」に似たものを感じる。画面は一見フツウのようでも密度は高い。「翔んだカップル」の鶴見辰吾、尾美としのりがフツウの大学生になつて登場する。モグラ叩きに涙した彼女の姿はもうそこにはない。「卵とニワトリみたいなもんだな」と鶴見辰吾はいう。「十五年たてばこの俺になるんだ」と三浦友和がダメ押しする。「あなたみたいにはならない」と答えた少年は窓から飛び降りる。答は台風の目の中であつたのだろうか？

相米監督が「台風クラブ」出品とともに提出した次回作の企画は、「傲慢にも」武田泰淳「富士」だそうである。